淡路瓦４００年祭 コンセプト

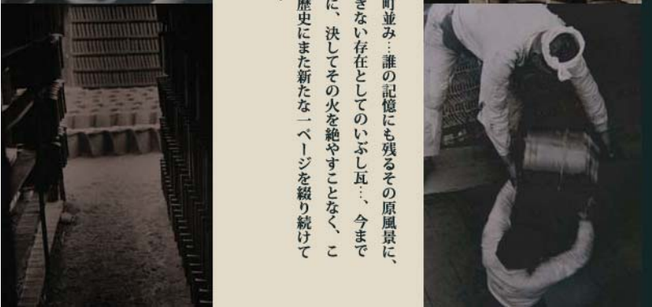
淡路島＝瓦島

Island AWAJI　Island KAWARA

~Emotional Island Awaji~

様々な形状の瓦を作りだす淡路島の瓦師たち、
そのすべての所作が美しく…。
そんな若い担い手たちが瓦の本来的価値を
ただただ知ってほしいと立ち上がりました。
まだまだ手指の技により生み出される
瓦作りの本来的な魅力を五感で感じてもらうことで、
その背景にある文化、ヒストリー、情緒なども
含めた瓦の溢れる感性価値を発信したい。

ここ淡路島において瓦造りが興ったのは今から遡ること四〇〇年前の一六一〇年…、世は天下泰平、まさしく磐石の礎を築かんと各地で築城の最盛期を迎えた頃であります。
その後、紆余曲折を経つつ今なお一〇〇軒以上の窯元が軒を連ねるここ瓦の島は、日本文化の象徴でもあるいぶし銀に輝く震の波を津々浦々に生み出し続けています。



世界が賞賛する和の町並み…誰の記憶にも残るその原風景に、決して欠くことのできない存在としてのいぶし瓦…、今までがそうであったように、決してその火を絶やすことなく、これからもその悠久の歴史にまた新たな一ページを綴り続けていきたいと考えます。

～感性と創造～
日本文化としての瓦の魅力

いぶし瓦の製法を伝えた明の一説は、一五七六年、織田信長によるこれまでに比類なき居城である安土城築城のため瓦を製作。城の始まりは戦国時代…財産保護という本来的なその存在意義は、織田信長の天下布武のもと権力誇示の象徴へと変質し、その姿も絢爛豪華なものへとなっていきます。
瓦でいえば、金箔瓦（焼き上げた黒瓦に漆を塗り金箔を貼ったもの）の使用などにもその流行がうかがえる。
この時代における贅を尽くして煌びやかに飾り立てた「絢爛豪華」な美、そして日本と異国双方の美を織り交ぜてその独特の個性を追い求めた「かぶき」「婆沙羅」、またその一方で、枯淡、閑寂といった究極なる簡素美を追求した「侘び」「寂び」の世界観、それら豊かな感性が矛盾なく絶妙に絡み合うのが日本の美意識の懐の深さです。
そんな柔軟かつ豊かな感性の一端は、屋根形状の変遷にも見られます。
渡来した仏教文化にそのルーツを見る「照り」屋根、稲作文化の根幹を成す神道に見る茅葺き、桧皮葺きによる「起り」屋根、それら違う文化を見事に融合させた日本独自となる「てりむくり」屋根を創造している。まさしくこれぞ「和」の文化である。

～淡路瓦四〇〇年の歩み～

慶長五年（一六〇〇）関ヶ原の戦いで勝利した徳川家康は、慶長八年（一六〇三）に征夷大将軍となり、天下泰平の世である江戸時代のはじまりです。
洲本城在城二四年になる賤ヶ岳七本槍の一人である脇坂安治は、東軍に寝返り、家康から淡路の所領を安堵された。その後慶長一四年（一六〇九）九月、伊予国大洲城主五万三〇〇〇石に転封される。その際、大津を大〝洲〟に改名し、脇坂淡路守と呼ばれるようになったそうです。その地では現在も淡路人形浄瑠璃も継承され、脇坂が淡路島をこよなく愛していたことが分かります。
かたや洲本城は、臨時に伊勢国津城主藤堂氏が城を預かっている。慶長一五年（一六一〇）二月、家康は淡路六万三〇〇〇石を池田三左衛門輝政の三男忠雄（ただかつ）に与えたが、池田忠雄は家康の孫で当時まだ九歳であったため、傅役（ふやく）として乾平右門長次が国政を執った。
池田氏は淡路統治の本拠を新しく由良に置き、大阪湾や瀬戸内海の制圧、西国大名の武者船没収、軍備削減の城として、岩屋城修築および成山への由良城築城を普請する。その際、播州瓦の名工理兵衛を招き古茂江で瓦を焼かせたのが、いわゆる淡路瓦のはじまりです。
この天下太平の世に、穏やかなる瀬戸内沿岸一帯に淡路いぶし瓦が燦然と輝きはじめる。
洲本城は水軍の城であり、豊臣秀吉による水都大阪城の出城にしたがい、大阪湾、紀淡海峡の制海権をめぐる重要な位置づけであった。海上監視、船団指令の核で防衛のための城であったが、徳川家康は淡路所領を池田氏に与え、対して岩屋、由良城を西国の外様として一大名になった豊臣家の大阪城ににらみを利かせるようになっていく。
慶長年間（一五九六～一六一五）は築城の最盛期を迎え、その技術も最高潮に達しました。
慶長一九年（一六一四）一〇月、大阪冬の陣が起こり、阿波藩祖蜂須賀家正は幕府の人質同様に忠誠をつくし、嫡男至鎮（よししげ）は大阪城攻めにおいて武功をあげた。翌元和元年（一六一五）四月、大阪夏の陣が起こり、池田忠雄の淡路軍は吹飯浦（ふけいのうら）で海上警戒にあたった。その後大阪城が陥落し豊臣家が滅亡することとなる。忠雄は備前二八万石と播磨四万石を賜り淡路を幕府に収めた。また理兵衛も弟子の弥右衛門を残し播州の国元へ帰っている。弥右衛門は淡路にとどまり、理兵衛小屋（分家）として、万歳村（都志）、尾崎村、都志浜村、谷村（仮屋）、天川村（由良）各地に瓦を広め、淡路瓦の元締めとして七代に及び理兵衛を襲名していく。
元和元年（一六一五）閏六月三日、幕府は蜂須賀至鎮に岩屋を除く淡路七万石余を与えた。元和三年（一六一七）に淡路全土が加封され両国同藩となり、その後二六〇年余り続くことになる。
蜂須賀家は淡路統治の中心を由良に置いていたが、寛永八年（一六三一）から一二年（一六三五）にかけて洲本に移した「由良引け」である。

～貧困と改宗～

寛永年間（一六二四～一六四三）、ここ津井村は村請制による年貢不足のため納入が困難となり、太郎左衛門ら一〇名（家族三六人）が淡路法華の布教の拠点である尼崎の本興寺あてに起請文（神仏への誓いを記した文書）を一札入れている。
尼崎の本興寺を本寺とする釜口村（東浦町）妙勝寺の日泉上人が、疲弊した津井村に銀三六〇目を与え、滞納していた年貢を支払い、阿波藩から瓦株を買い取って瓦生産を導入し、その引きかえに津井村が一村まとまって真言宗から法華宗に改宗することになる。

～改革と規制～

瓦葺きは当時、武家屋敷や社寺建築にしか認められず、民家などは草葺きや板葺きであったため、密集していた江戸ではたびたび火災に見舞われ、明暦三年（一六五七）大火があって江戸の町をほとんど焼き尽くした。その江戸の復興にも幕府は「禁行令」を出し、大名でも土蔵以外の建物には瓦葺を禁止している。防火対策として藁葺き、茅葺きを禁止して板葺きに土を載せることを奨励したが、それでは雨水を防ぐことができず、そこで「禁行令」に触れないように平瓦だけを葺いた歴史もあり、これを「火除瓦」といった。
その火除瓦の登場から一〇年、延宝二年（一六七四）に本葺瓦の平瓦と丸瓦が一体となった、関東では「江戸葺き瓦」、関西では「簡略瓦」と呼んで後に「桟瓦」と呼ばれる瓦を創案したのが近江大津の西村半兵衛である。
八代将軍吉宗時代、漸く瓦葺きの禁止令は廃止され、民家屋根への瓦葺きが奨励されるようになる。吉宗はさらに壁を土蔵のようにし瓦葺きを義務づけ、そして復興のために享保八年（一七二三）には、瓦に一〇年年賦の拝借金制度を設けて、その後二二〇年間続いている。
享保一〇年（一七二五）津井村では新しく二二人が瓦師となっている。他の村の新瓦師と合わせて二九人となり、従来から存在する瓦師とあわせて、淡路では四六人の瓦師により一六カ村で生産をしていた。しかし享保一一年（一七二六）には製造禁止となり、清水理兵衛を通じて郡奉行は瓦の製造の割り当てを行っている。

～株仲間～

阿万東村の瓦製造は、津井村瓦師平右衛門一族により元録一六年（一七〇三）に、阿万西村へは享保一四年（一七二九）に伝えられたとあるが、天保・弘文年間（一八三〇～四七）のころ、津井村の通称「登龍」という人が移住して始めた説と、津井村庄屋古東領右衛門の小家浅平という人が天明三年（一七八三）に移住して始めた説、また文化元年（一八〇四）庄屋古東家の小家忠左衛門が阿万東村に移住して始めたともある。
津井村では、文化二年（一八〇五）頃にあった棟数五九三軒のうち、居宅二七五軒、牛屋一〇〇棟、納屋九九棟、瓦納屋四八棟で庄屋古東家庄八が最も大きい瓦業者であった。

▶津井村誌

～夜明け前～

津井村は三三〇戸のうち瓦手間、日雇稼、船稼などで生計をたてる者が四割の、いわゆる生活困窮の村で、文久元年（一八六一）には多数の飢人を出すまでに至り、そこで庄屋古東領左衛門は藩庁に嘆願書を三度に亘って送り、飢扶持や拝借銀の下付けを受けている。安政二年（一八五五）にも津井港を二年かけて改修している。
その古東領左衛門は安政五年（一八五八）の日米修好通商条約が結ばれた年、志士藤本鐵石と会い、その後書を交わし領左衛門は尊王討幕のために資金を提供するようになる。
天保一四年（一八四三）には第二代将軍家斉の二十二男で、斉昌（なりまさ）の世子の斉裕（なりひろ）が一五代阿波藩主になり、蜂須賀家は外様であって幕府より松平姓を許されるようになり親藩のような立場となる。そのため淡路島は幕吏（ばくり）一幕府の役人）の目が届かず、勤皇志士たちにとって安全なところでもあったようである。
文久三年（一八六三）に淡路から古東領左衛門と福浦元吉が勤皇愛国の志士として、天誅組大和義挙に参加した。天誅組は幕府に対してクーデター（八・一八の政変）を起こしたが藤本鐵石と福浦元吉は戦死し、古東領左衛門は逮捕され斬殺された。
大政奉還して明治維新後、明治三六年、明治天皇は領左衛門に正五位を追贈し、また明治四五年福浦元吉に従五位を追贈した。
明治維新となり、瓦の生産に関して株仲間制度が廃止され、屋敷にも制限がなくなったため津々浦々に瓦需要が激増した。

▶文章 三原郷誌参照

石積みの港 津井港
その昔、瓦は機帆船にて津々浦々へと運ばれていきました。

2010 HOOVERS FESTIVAL OF AWAJI ISLAND ROOF-TILE

4００年の歴史を繋ぐ窯元たち

MAP

淡路瓦の誇り
-the signs of the emotional masterpiece-

今から四百年程前のことなんだ…。
その昔、淡路島は瓦の一大産地として
国の内外へ淡路瓦を出荷していたんだ。
見事に焼き上がった瓦の生み出す美観
そのあまりの美しさに、人々は驚き、
五感をいたく刺激したという歴史の足跡の瓦島ってワけ。

もともと瓦の産地〜瀬戸の海〜、
そのうち淡路瓦は、瀬戸内海の
特撮
特撮
特撮
特撮

会期：２０１０年５月１日～３１日

開催地：**淡路島＝瓦島**

主催：淡路瓦４００年祭実行委員会
http://project400.biz

窯元めぐりの出発点

総合案内所：**産業文化センター**「瓦ッ舎 gallery －時－」
〒656-0341 淡路島南あわじ市津井2285-4 TEL.０７９９-３８-０２０１ FAX.０７９９-３８-０２０２

人にやさしい 淡路瓦 **淡路瓦工業組合** 〒656-0332 兵庫県南あわじ市湊134 TEL:0799-38-0570 FAX:0799-37-2030 http://www.o-kawara.jp/